

平成26年度 教育事業
子どもたちのハートをつかめ！

子どもを多角的に見る視点の大切さやソリューション・フォーカスト・ブリーフセラピー、選択理論、コラージュの活用を学ぶことで、子どもたちが抱えるストレスや悩みへの対応の仕方などについて、より具体的・実践的に学べる場となりました。また、参加者相互の交流を深めることで、支援体制のネットワークも広がりました。

1 事業実施までの経緯

本事業は日本学校教育相談学会愛媛県支部と連携し、今回18回目を迎えた。実施当初は、学校現場において不登校が大きくクローズアップされ始めた時期であり、当時の交流の家職員と日本学校教育相談学会愛媛県支部会員とのネットワークを活用し、学校現場で悩んでいる教職員とともに教育相談をどう捉えればよいか、子どもたちとどう関わっていけばよいかを考える場としてこの事業をスタートさせた。平成13年度からは不登校のみならず、社会的問題にもなっている引きこもりがちな青少年にまで対象を広げている。今回も日本学校教育相談学会からの紹介をもとに講師を選定し、よりよい研修会になるよう、学会担当者や講師と連絡を取り合い、打合せを重ねた。例年、アンケートで要望されている「より学校現場で実践できる内容を」という意見を重視し、子どもたちとの関わり方、関係性の構築の仕方を調査、研究の結果から学ぶ講義・演習やソリューション・フォーカスト・ブリーフセラピー、選択理論、コラージュを学ぶことをテーマに本事業を企画・実施した。

2 ねらい

教育相談にかかわる教職員・施設職員等が、いじめや不登校などの問題を抱える児童・生徒、そして、引きこもりがちな青少年およびその保護者の理解と対応の仕方、学校現場で活かせる教育相談の手法などについて、教育学的・心理学的見地から研修を行う。

3 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
日本学校教育相談学会愛媛県支部

4 後 援 愛媛県教育委員会・大洲市教育委員会
愛媛新聞社・NHK松山放送局・あいテレビ

5 期 日 平成27年1月10日（土）～平成27年1月11日（日）

6 場 所 国立大洲青少年交流の家

7 参加人数 教職員、不登校対応施設職員、社会人等 91名

8 講 師 大久保智生氏（香川大学教育学部准教授 人間科学博士）
相模健人氏（愛媛大学教育学部准教授 学校臨床学博士）
井上千代氏（西予市立明浜中学校 養護教諭）
渡部和敬氏（松山市立双葉小学校 教諭）

9 日 程

13:30	14:10	14:30	17:30	18:30	20:00	21:00	22:30
10日(土)	受付	開講式	第1部 大久保 智生 氏 『子どもの問題行動と学校・学級の荒れ：問題行動や学校・学級の荒れはどのようにとらえられるのか』	夕食	第2部 大久保 智生 氏 『子どもを見る視点の検討：子どもの何を重視し、どのように子どもを見ているのか』	情報交換会	入浴等 就寝
8:30	9:00	講義・演習 第3部 『ワークショップ』 相模 健人 氏「ソリューション・フォーカスト・ブリーフセラピーの教育相談への活用 —児童生徒編—」 井上 千代 氏「幸せと夢実現のために知っておきたい、脳の秘密(選択理論心理学)」 渡部 和敬 氏「体験！学級で使える開発的コラージュ」				11:30	12:00
11日(日)	受付					閉講式	解散

10 活動内容

【1日目】

「開講式」

最初に主催者である国立大洲青少年交流の家の松岡孝次所長と日本学校教育相談学会愛媛県支部の芳我明彦理事長が挨拶を述べ、18回目を迎える教育相談に関する研修会「子どもたちのハートをつかめ！」が開催された。

「講義・演習」 第1部 『子どもたちの問題行動と学校・学級の荒れ：問題行動や学校・学級の荒れはどのようにとらえられるのか』

香川大学教育学部 准教授 人間科学博士 大久保 智生氏

第1部は香川大学教育学部准教授、人間科学博士でもある大久保智生氏により「子どもたちの問題行動と学校・学級の荒れ：問題行動や学校・学級の荒れはどのようにとらえられるのか」と題して講義・演習が行われた。

まずはじめに、今回の講義・演習のねらいは、具体的な指導方法の教授ではなく、多角的な視点を身につけることであることが伝えられた。

続いて、目の前の子どもたちが問題行動をとった場合の対応について、これまでの実証データを元に、大久保氏の見解が述べられた。ここでは、問題行動の見方を変えることで、援助や介入の対象が広がること、また無数に存在する関係の中で、問題を支えている関係が何かを見抜く目が必要であることなどが語られた。また、心理学を通して問題行動への対処を考えた際には、直感的な対処方法ではなく、データに基づいたアプローチを考慮することが重要であると語られた。大人たちは問題行動に直面してしまうと、「どうにかしなければ」とのあせりから、子どもたちを見つめる視点を狭めてしまう傾向があるが、例えば、問題行動をとる子どもがいれば、その個人にのみ注目するのではなく、集団にも視点を広げ、周囲の子たちへの対応も検討することやダブルスタンダード化させた指導は避けること、情報を公開することで周囲からの協力が得られやすくなることなど、広い視点をもって問題の本質にアプローチすることの有用性が、事例をもとに紹介された。

また、学校・学級の荒れについては、荒れた原因を子どもたちの問題、教師の力量不足など短絡的に捉えないように提言がなされた。その上で、問題行動には複合的な要因が介在しているという視点を常にもち、教師がチームとして一般生徒を含む全ての子どもたちと関わりをもつことや、地域の力を借りるといった選択肢などもあることが示さ



れた。

第一部の最後に、大久保氏より「それは解決できない問題なのではない。私の今の見方では解決できない問題なのである」という言葉が伝えられ、問題行動に対する自らの見方を見直してみることが、解決への近道であるということが理解できた。

「講義・演習」 第2部 『子どもを見る視点の検討：子どもの何を重視し、どのように子どもを見ているのか』

香川大学教育学部 准教授 人間科学博士 大久保 智生氏

第2部では、引き続き大久保氏により「子どもを見る視点の検討：子どもの何を重視し、どのように子どもを見ているのか」と題して講義・演習が行われた。ここでは、現代の子どもたちの実態について、データを元に客観的に実情を捉えることの重要性や言説にとらわれない視点を持つことの有用性が説かれた。

まず、現代の青少年の社会性について、コミュニケーション能力と規範意識の2つの観点に焦点を絞って考察が述べられた。青少年の社会性については検証を試みた結果、いずれも低下はしておらず、むしろ高い数値を示す場合もあることが示された。社会性が欠如しているように見えてしまうのは、例えば「現代の子どものコミュニケーション能力は著しく低下している」等の言説がもとで偏った見方をしてしまうのではないかといった内容について調査結果をもとに見解が述べられた。

最後に、子どもたちの問題行動を見る場合、ただ単純な因果関係で現象を理解するのではなく、日々の関わりを通して多様な背景等を見つめることの大切さや、自らが子どもたちの何を重視して見つめる癖があるのかなど、大人たち自身の視点について、ふりかえる必要性があることが説かれた。

【2日目】

「講義・演習」 第3部 『ワークショップ』

愛媛大学教育学部准教授・学校臨床学博士 相模 健人氏

西予市立明浜中学校養護教諭 井上 千代氏

松山市立双葉小学校教諭 渡部 和敬氏



第3部は愛媛大学教育学部准教授であり臨床心理士の相模健人氏による講義・演習「ソリューション・フォーカスト・ブリーフセラピーの教育相談への活用」、西予市立明浜中学校養護教諭の井上千代氏による講義・演習「幸せと夢実現のために知っておきたい、脳の秘密（選択理論心理学）」、松山市立双葉小学校教諭の渡部和敬氏による講義・演習「体験！学級で使える開発的コラージュ」が3つの会場に分かれ行われた。

相模健人氏の講義・演習では、ソリューション・フォーカスト・ブリーフセラピー(SFBT)の教育相談への活用について紹介があり、実際に教育相談の場面を想定したロールプレイを実施した。模擬演習の様子はビデオ撮影され、参加者全員が視聴する中でカウンセリングのポイント等について、具体的なふりかえりがなされた。

井上千代氏の講義・演習では、「他人と過去は変えられないが、自分の現在と未来は変えられる。」という理念のもと選択理論についてワークシートや資料を活用し、演習を行うことで分かりやすく学ぶことができた。子どもたちとの普段の関わりの中で、いかに自己肯定感を把握し、育てていくかを、選択理論をベースに演習がなされた。

渡部和敬氏の講義・演習では、コラージュについての説明がなされ、作成を体験した。今回はペアによる相互法での実習を行った。作品が完成した後に、お互いに思いを伝え、受け止めるための技法について演習を通して学び、活動のふりかえりを行った。

11 参加者の声

参加者のアンケートの結果

*満足：65.2% *やや満足：34.8% *やや不満：0.0% *不満：0.0%

- いろいろな問題をもった方々に対応できる内容だった。県内の普段会わない地域の方々とも話ができて良かった。
- 子どもたちとの関わりは「スキル」も当然必要だが、「意識」の持ち方一つで何かが変わるということに気づかされ、即、実戦可能な研修であると感じた。
- 生徒の問題行動をいろいろな視点から捉えること、問題行動をしない生徒にも目を向けること等、指導の大切なポイントがよく理解できた。
- 問題行動の捉え方、子どもを見る視点が変わった。世間の風潮に流されることなく一歩引いた目線で子供たちと接していきたいと思う。
- 子どもを見るとき視点についてのお話は、自分の視点を柔軟にすることが大切だと実感した。人とのかかわり方は難しいけれど、おもしろい。
- 講義もさることながら、夜の情報交換会も、初対面の先生方と楽しくお話することができて、とても有意義な2日間であった。学校だけにいると視野が偏り狭くなりがちだが、この2日間、様々な学校の先生やいろいろな立場の方々と情報交換することによって、自らの見識に広がりをもたせられた。

12 成果と課題

今年度も、昨年度同様2日間開催とし、1日目は著名な講師を招いての講義・演習とし、翌日には日本学校教育相談学会愛媛県支部の会員講師によるワークショップを行った。1日目の講義は、子どもたちとの関わりについて、経験や言説にとらわれることなく、多角的な視点で問題行動を見つめることの重要性が示され、参加者の気づきが促された。

情報交換会やワークショップでは、参加者相互の交流の場を設け、多くの考え方や事例、対処方法などをお互いに交換することができただけでなく、新たなネットワークを構築し、協力体制へとつなげられた参加者もいた。このことから、宿泊型の2日開催の成果が現れていた。

昨年度の反省から、広報の方法として、エリアの拡大から広報先の開拓をめざした。新たに児童養護施設、警察署、県外の学会支部を追加したところ、児童養護施設、警察等からの参加があった。

課題として、参加者の固定化や若年層の参加割合が低いことが挙げられる。子どもたちとの関わりを学ぶ上で、若年層の職員ほど、理論や実践を学ぶ必要があると考える。周知の方法等を検討し、次年度につなげて行ければと考える。